

あたたかさに触れて

信州大学人文学部3年 高橋陽子（日本文学専攻）

そもそも私の韓国への興味は、ハングル文字に惹かれたことに端を発す。「この記号のような文字を読み書きできるようになりたい」、これだけであった。以来ハングルの学び始めたのだが、語学という枠にとどまらず実際に韓国に行ってみたいという強い願望が芽生えるまで時間はかからなかった。そしてついに今年、そんな私に願ってもない好機が訪れた。それが、今回参加させていただいた「第4回韓国言語文化研修」である。

9月13日～23日の10日間は、言葉にできないくらい、本当に貴重な時間であった。

その10日間をふり返ってまず思い出されるのは、カトリック大学校でお世話になったすべての先生方・学生さんのいきいきとした姿と笑顔である。人付き合いがあまり得意でない私は、出発前に先生がお話してくださった「心を開いて礼をつくす」という目標に沿うことができるのかと不安は大きかった。しかし、その不安も2日目には解消されていた。カトリック大学校のスタッフの皆さんは、それだけあたたかく迎え入れてくださったのだ。

また、言葉の面でもずいぶん甘えてしまった。キャンパス内で、街で私が目にした物を指さして、ハングルの単語を口にしたり簡単な挨拶をしたりすると、韓国の学生さんが嬉しそうに「そうそう」と笑ってくれる場面は多々あったが、日本語に長けた勤勉で親切な学生さんばかりであったため、「少しでも多くの韓国語を話す」という個人的な目標の達成感は、ほとんど得られなかった。しかし壁になるはずの言葉の違いを逆手にとるように、たとえ単語であっても言葉を通して韓国の学生さんと自分との間に笑顔が生まれたことは、韓国に滞在中で一番嬉しく、感動したことであったように思う。この喜びは、日本のサブカルチャーへの興味をきっかけに、日本語を学ぶに至ったという学生さんと話をしたときにも感じられた。うつむきながら遠慮がちに日本語で、時には英語で一生懸命話をしてくれていたその学生さんを前に、私は偶然持っていた鞆に、海で拾った日本の某人気アニメキャラクターのマスコットが入ったままである事を思い出した。それを差し出したことで雰囲気は一変した。私はわずかながら自分が知る限りのアニメの話をした。彼女の笑顔に会うことができた。この経験は私に、いつでもどこで何がどのようなきっかけをくれるかわからないもので、日頃から様々な事象に目を向けるということの意義を再認識させてくれた出来事だった。ここでは日本のアニメや芸能人に興味を持つ韓国の若者が多いこともわかった。

それから日韓の学生によるグループディスカッションもたいへん考えさせられることが多く、非常に有意義であった。今回の研修には日本全国各地の8大学の参加があり、国籍も大学も関係なくグループを編成してのディスカッションであった。題は、＜将来の夢＞や＜余暇の過ごし方＞といった日常的なものから＜2003年ワールドカップ日韓共同開催を終えて＞など歴史や世論が絡んでくるものなどバラエティーに富んでいた。そこには、国や大学の違いをゆうに超えた、ただ純粋に「大学生」として向き合っている我々がいた。韓国の大学生も日本の大学生も、将来への期待と不安、自由な時間にすることは（当然個人差はあれど）根本部分では酷似していることがわかった。ここまで差が見られないとは意外であった。そして知り合って間もないにも関わらず、自分の夢や日本への思いを真剣に話してくれたことが本当に嬉しかった。

この他、ホームステイは現代の韓国の文化にふれる最良の機会であった。食卓では韓国の食文化を教えていただいたり、伝統衣裳を着せていただいたり、ショッピングに出かけたりした。1泊と短い時間であったため終始客人として接していただいたが、家事など色々なお手伝いをさせていただきかかった。そうすることで少しでも感謝の気持ちを表したかったと、今でも心残りだ。帰国後もお手製のキムチを送っていただき、現在お礼の手紙を書くのに悪戦苦闘中である。

このように10日間行く先々で人のあたたかさに触れ、前にもまして人が好きになったように思う。短絡的すぎるかもしれないが、韓国の学生さんとの共同生活を経た今、「アジア人」という、私にとってはまだ新しい概念を肯定していくことができそうだ、と感じている。この気持ちを忘れずに、もっとハングルを学び今回お世話になった方々に逢いに行くことができればと思う。交流のうえで、伝えたいというその気持ちと笑顔は何にも勝るものだ教えてくれた、海のむこうの友人たちのもとへ、いつか再び。

最後に、終始手厚く私どもの面倒を見てくださったカトリック大学校の学生さんを含むスタッフの皆様に、感謝してやまない。同時に、この素晴らしい機会を専攻外の私にも与えてくださった沖先生にも、感謝を申し上げたい。

2003年韓国文化研修で得たもの

信州大学人文学部3年 田口愛葉（日本語教育学専攻）

2003年9月14日から23日までの10日間、以前から交流のある韓国カトリック大学校・国際交流処が主催する韓国文化研修に参加させていただいた。数多

くあるカトリック大学校の姉妹校の中で、日本の大学が招かれたのは今回が初めてということだった。そして、その日本の姉妹校の中から、わが信州大学を含む計8校の、教職員を含めた27名が参加した。この文化研修で私が得たものについて、以下に述べたい。

このプログラムの大きな目的は、その名の通り、文化を学ぶということだった。10日間の中には、講義、授業参観、歴史的建造物などの観光や見学、ディスカッションなど、さまざまな文化を学ぶためのものが組み込まれていた。中でも一番印象的だった、というより、文化を学ばざるを得なかったのが、板門店見学だった。板門店は、公称JSA、北朝鮮との軍事分界線から南と北側に各2キロずつ分割した非武装地帯の中にある共同警備区域である。日本でも、北朝鮮についてのニュースがたくさん流れているし、その内容もさまざまである。それにより、北朝鮮のこと、また韓国との分断のことに詳しくなっているような気でしたが、実際は一步引いたところで見ていて、自分とは関係のないこととしてしか考えていなかったのだと気づかされた。板門店の中のあの静けさと緊張感、びりびりとした空気に、事の重大さを身にしみて感じたのだった。一つの同じ民族が敵対し望遠鏡でお互いの様子を観察している。元々は両軍人がバラバラになって警備していたが、今では軍事分界線が引かれている。ただの国境ではない。国民や他国の人々の分断ボケとは一転、ここは世界で一番緊張している国境ではないかと思った。

板門店見学により、南北朝鮮の分断の実際を知ることができて、良い経験になったと思うと共に、私が事前に持っていた知識はあまりにも少なく、文化を学ぶにいくものとして相応しい態度ではなかったのではないかと反省した。その他の見学、訪問でも同じことが言えたと思う。

他にも印象的なプログラムがあった。韓国語の講義である。受講者のレベルはさまざまだったが、初級者のための授業を行なってくださったので、初級段階の私にとってはありがたいものだった。教えてくださった郭先生は直接法で講義してくださり、読み書きと基本的なあいさつ、さらには買い物や料理の注文というところまで進めてくださった。料理の注文は、講義日が帰国の前日だったことや外食の機会がなかったことから使用することがなかったが、買い物の表現においては、購買やコンビニエンスストアでの買い物ですぐ使える実用的なものだった。一回二時間の授業をたった三日行なったただけだったが、私はハングルを間違えずに読めるようになった。講義目標の「韓国語の文字が読めるようになり、韓国語で物を買ったり料理の注文ができるようになる。」を、100%とまではいかないが、達成できたと思うし、受講者の韓国語レベルを短期間でそこまで上げてくださった郭先生の講義を魅力的だと感じた。

研修中は、他の大学の学生やカトリック大学校の学生との交流が絶えなかった。

日本語教育学で訪れるときとは違い、ヘルパーとして一緒に寝泊りしてくれた学生や案内役になってくれた学生、ホームステイを受け入れてくれた学生のほとんどが日本語を第二専攻としている学生かまったく日本語の知識のない学生だった。ホームステイでは、私を受け入れてくれたご家族は、娘であるハン・ヘヨンさんをはじめ誰一人日本語が話せず、私もあいさつ程度の簡単なものしか韓国語が話せなかった。会話は、というと、私がヘヨンに英語で話し、それを彼女が韓国語で家族に通訳、またその逆であった。さらに自由行動のときはヘヨンが気を利かせて、日本語が話せる彼女の友達、スヒョンを連れてきてくれた。三人で買い物をしているときはスヒョンの、家族との会話のときはヘヨンの通訳に頼り、二人にかなりの負担をかけてしまったと思う。私にもっと韓国語の知識があったら、あと少しでも話せたなら、より多くの、より深いコミュニケーションが図れたのではないかと思うと、韓国を訪れる前にもう少し韓国語の勉強をしておくべきだった。

今回の韓国文化研修は、私にとっては反省点や改善点の多い、また自分の考えや態度を見つめなおすことのできた貴重な経験だった。文化や伝統についての知識の少なさ、韓国語の知識の少なさ。韓国語については仕方のないことかもしれないが、それでももう少し努力することができたのではないか。そう思ったのには、日本の他大学に韓国語の話せる学生がいたことにある。彼らは大学以外で学んでいたという。同じ大学生、影響を受けないわけはなかった。

韓国の学生だけでなく日本の他大学・他専攻の学生と交流できるなどという機会は今後もうないかもしれない、とても貴重な経験だった。そんな交流を今回経験でき、多くのことを学べて、また楽しむこともできて本当に嬉しく思う。今回招待して下さった皆さんをはじめ関わって下さったすべての皆さんに心より感謝したいと思う。

韓国文化研修を終えて

信州大学人文学部3年 中島葉子(日本語教育学専攻)

10月14日から23日の10日間、私たちは韓国のカトリック大学校・国際交流所主催の韓国文化研修プログラムに参加させていただく機会を得た。今回は、信州大学からだけではなく、日本国内の七つの大学から来た学生や教職員の方々とともに韓国での10日間を過ごした。以下、今回の研修プログラムで得たこと、考えたことを述べていきたい。

今回は、カトリック大学校・国際交流所の方々に組んでいただいたプログラムに沿って、さまざまな韓国国内の施設に訪れたり、伝統芸能を鑑賞したり、またホームステイやカトリック大の学生との交流や討論を通して、まさに「文化研修」

の名にふさわしい時間をすごせたように思う。以下、いくつか具体的に述べていこうと思う。

私が最も考えさせられる点が多かったと振り返るのは、板門店を見学した時のことである。これまで、日本のニュースでマスコミが報道する北朝鮮に関するニュースは、まさに他人事のように聞き流していたことをとてつもなく実感することになったからである。その証拠に、実際に板門店に入ったときには、違う世界にきたような気持ちになり、とても緊張した。おそらく、実際に北朝鮮を間近にしたことがない人は、誰もが以前の私と同じような心境であるとおもう。いくら話しに聞いても、その緊張感を実感できる距離に行かなければ、やはりそれは「聞いた話」でしかないのだと思う。今回板門店を見学したことで、やはり韓国と北朝鮮は停戦状態の下にあり、もともと同じ民族が住んでいたところが「分断」されているという状態に変わりはない、ということを初めて実感した。私たちの今回の韓国訪問で友達の輪が確実に作ることができた、と実感できる裏側に、実際は解決していない問題も、同じアジアでかかわりを持つ機会も多いであろう友人たちが抱えているということを、改めて考えさせられた。

次に、韓国語と、韓国の社会・歴史・家族についての授業について述べておきたい。今回のプログラムでは、韓国語の授業を計三回受けさせていただいた。私は、大学一年生のときに韓国語を選択して多少勉強したことはあったが、母音・子音が読めて挨拶が幾つか言える程度で、ほぼ初級者だった。しかしながら、わずか一回二時間の授業を三回受けただけで、なんだか韓国語が少しできるようになったような気分になったのは、不思議だった。母音の発音から始まって、幾つかの単語や、数の数え方、簡単な会話(食堂や、ショッピングの場面など)まで到達させることができた郭龍珠先生の技術は、イメージとしていつまでも覚えていたいと思った。本当に情熱を持って教えていただいたのを実感できたからこそ私達たちも自然と身が入り、したがって身につきやすかったという結果になったのではないだろうか。先生がどれほど一生懸命やってくださったかは、授業の最後で先生が涙を流されたことから強く伝わってきた。先生の技術が素晴らしかったのはもちろん、生徒を引き付ける明るい雰囲気と姿勢は、とても勉強になった。韓国語以外の授業でも、貴重なお話を聞くことができた。韓国国内が分断状態に慣れて「分断ボケ」のようになっているのではないかと、ということや、韓国の独立運動、分断状態に至るまでの歴史、自由化社会に至る経緯についてなど、日本の学校で学ぶ社会の授業などでは詳しく知ることのできないお話を聞くことができた。

最後に、今回一緒に時間を過ごしたたくさんの人たちとの交流について述べておきたい。今回のプログラムでは、日本の各地から来た多様な分野を専攻する学生と教職員の方々、それにカトリック大の学生と寝食を共にし、また国際交流所

のスタッフの方々にはつきっきりで面倒を見ていただいた。私は、その日の日程など大事なアナウンスメントを英語で受けるのもおそらく初めての経験だったし、同時に日本語の能力がまだ低い韓国人の学生と、意思を何とか疎通させるために英語を用いる、というのも貴重な体験だった。やはり異なる言語を母語とする者同士が意思疎通を図るときに選択するのは英語なのか、と身をもって体験した。またそうでなくても、日本語で一度伝えても伝わりきらなかった場合に、平易に言い直すことを試みる、というのも、日本にいるときにはできなかった経験であり、貴重であった。このようなコミュニケーションの場身をおくことができたのは、本当にいい経験になったと思う。また、このように完全に言葉が通じ合わない者同士であっても、交流し、仲を深めることができるということも体験できた。

今回のプログラムでは、ここに書いたこと以外にも、多くの場所を訪れ、多くの人に出会い、たくさんの貴重な体験をした。このような機会に恵まれたこと、またこのプログラムの成功のために多くのスタッフや先生方が尽力してくださったことに感謝したい。今回の経験を今後生かせるように、また次にこのような機会に恵まれたら、今回友達になった人たちと再会するためにも、ぜひまた参加したいと思う。

「韓国文化研修」に参加して

信州大学人文学部3年 佐藤智佳子（日本語教育学専攻）

去る9月14日から23日までの10日間、私は韓国のカトリック大学校での「韓国文化研修」に参加した。日本からは、北は北海道、南は京都の大学から学年も学部も違う23人が参加し、韓国の言語や生活、歴史を学んだ。教室だけではなく、板門店や国立中央博物館など実際にその場所へ行き、自分の目で見、感じ、色々な体験ができた。そして何よりこの10日間は、日本についてそして韓国について今まで以上に考えさせられたと思う。

韓国へ着いた当初、日本人と韓国人の顔のつくりや肌の色が似ているため外国であるという実感がほとんどわかかなかった。バスに乗り、車線の違いや街にあふれるたくさんのハングルを見たときにはじめてここが韓国ということが実感できたのを覚えている。

私自身はじめての海外ということで、はじめから緊張の連続だった。また、日本の学生だけではなく、国も文化も言葉も違うカトリック大学校の学生と10日間もの間、生活をともにすることが不安でもあった。私は、韓国は隣の国という意識しかなかったため、韓国語がまったく分からなく、韓国のことについてほとんど何も知らなかった。そのため、はじめは戸惑ってばかりだった。しかし、日

が経ち言葉を交わしていくにつれ、次第に打ち解けていった。国が違うため考え方も違うわけではなく、言葉や文化の違いはあるが、日本の同じ年代の人とあまり変わらないということを実感した。また、互いの国のことに対して興味を持っていたため、早く打ち解けられたのだとも思う。

今回のプログラムでは様々なところへ行く機会があった。中でも一番印象に残っているのは、4日目に行った板門店である。板門店は韓国や中国などの北朝鮮との国境がある国の人は、亡命などの様々な危険性があるため、めったに来られないという。非武装地帯であり、何の自由も許されていなく、いつ発砲がおきてもおかしくない状況にあり、観光気分が一気に吹き飛び、緊張に変わった。銃を持ち、まっすぐ先の軍事境界線を見つめたまま、蠟人形のように静止して警備する兵士。テレビでよく目にするところのある青い壁の会議室。今までは映像だけの世界だったが、確かに緊迫した状況がそこにあった。ガイドさんの「北朝鮮と韓国は今も休戦状態にある。そんな事実を忘れ、今では戦争ボケになっているのではないか。」という話がとても印象的だった。日本ではよく平和ボケという言葉は耳にするが、さすがに戦争ボケは聞いたことはなかった。普通に生活している中にも常に戦争と隣り合わせであり、いつ戦争が始まってもおかしくなく、想像できないくらい恐ろしい。このような状況の中で韓国の人たちは生活しているのである。この戦争ボケという言葉聞いて、今まで私が韓国に対して持っていた印象はまったく違うものとなったと思う。北朝鮮と韓国の境界線である共同警備区域は、すべてが微妙な中で進んでいく世界であった。そして、北朝鮮と韓国の深く難しい関係を今一度、私たちに考えさせたように思った。ここで感じた空気は、10日間滞在した中で最も緊迫し、それまでとはまったく違う世界だった。日本では決して感じる事ができず、想像さえもできない現状がそこにはあった。

プログラムの中には、韓国語の講義も含まれていた。韓国語がまったく分からない私は、不安を感じながら臨んだ。韓国語の先生は、日本語が話せないため、韓国語を中心に、それに少し英語を混ぜた直接法で授業は進められた。先生の明るいキャラクターもあり、授業はとても楽しかった。また、日本人の学生のレベルの高さに驚き、刺激され、語学力の必要性を感じられずにはいられなかった。私は日本語しか話せなかったため、韓国語や英語を話している人を見ると、焦りを感じた。そのため、韓国に来たからには、少しでも多くの言葉を覚えて、日本でもう一度勉強したいと思った。

今回のプログラムを通して、韓国の文化だけでなく言葉にも触れることができ、今の韓国の現状をほんの少しであるが見ることができたと思う。少し心残りなのは、ほとんどのコミュニケーションが日本語だったということである。もう少し韓国語を勉強してから韓国に行くべきであったと思った。しかし、日本語だけのコミュニケーションの中でも得ることはあったと思う。たとえば、日本語の通

じない環境で、身振り手振りで日本語を話すことは自分自身にも勉強になった。また、日本ではほとんど意識しないで言葉を使っていたが、日本語を勉強している学生と話すときには、ゆっくりと分かりやすい日本語をつかい発音もはっきりするように心がけていた。いままでほとんど無意識の中で使っていた日本語が、意識して使っている状況であることを実感できたと思う。この体験があったおかげで、私の中では日本語の重要性がより大きくなったとともに、自分自身の言語や様々な知識不足がはっきりわかった。これからは、知識不足を補うために日本だけではなく、韓国やほかの国のことについても学び、吸収していきたいと思う。

また、日本と韓国の学生による討論会を通して、国と国との違いだけではなく、一人の人として個人が何を思い、将来をどのように考えているのかという意見交換をし、たくさんの人の考えを聞くことができたことは、自分にとってもプラスであり、自分の将来について考えさせられるよい時間になったと思う。自分は何をしたらいいのかなど、ほかの人の意見から色々なことが発見できたのではないかとも思った。限られた時間だったため、もう少し長い時間をかけて話し合いたかったと思う。

「韓国文化研修」では、とても密度の濃い 10 日間を過ごすことができた。また、日本だけではなく、韓国にもかけがえのない友達ができることを大変うれしく思う。ほかの人の意識の高さに刺激され、自分なりに悩み、考えることもあり、自分を見つめなおすよい機会になったと思う。そして、何よりも今まで以上に韓国のことを考えるようになった。国と国とのつながりだけではなく、人と人とのつながりの大切さを改めて実感できた 10 日間になったと思う。

最後に、今回の「韓国文化研修」で私たちを迎え入れ、お世話をしてくださったカトリック大学校のスタッフの皆さんや学生の皆さんに心から感謝をしています。本当にありがとうございました。